



文は信なり№46

アフターコロナに向かって 2023年初夏号

日本クリスチャン・ペンクラブ（JCP） 発行責任者 三浦喜代子（代表）

事務局 131-0043 墨田区立花 4-6-13 090-6504-7669 郵便振替 00170-0-61838

寄稿者・三浦喜代子 松下勝章 山角正子 榎尚子 本田真貴
長谷川和子 安東奈穂美 他 目次は最終頁

アフター(のち)とこれから

三浦喜代子

世界はコロナ惨禍からウイズコロナへ、今や「アフターコロナ」の様相である。しかし、ほんとうにコロナウイルスが消滅した「アフター」の日が来るのだろうか。世の中は「アフターコロナ」をどういう意味で使っているのだろう。

コロナ禍が始まって約一年を過ぎた二〇二〇年の暮れに、この『文は信なり』は初冬号に『私とコロナ禍』として特集を組んだ。私は「疫病とキリスト者 歴史を振りかえって」の一文を寄せた。おもに二つの書物から、古代から近年に至るまでの疫病（伝染病）の推移を調べ、それをベースにした。そこから規模も流行期間も被害も最大のもの、ペストであることを知った。

今回、その時の書物『ペスト大流行』を読み返してみた。前回もこころ惹かれて引用したが、著者の村上陽一郎氏は『・・・ほとんど稚拙とさえいえる一筆一筆に込められたアンジェリコの祈りは、死の淵を見たヨーロッパの魂が、芸術的な美しさを超えた、ひたすらなる信仰の内面に立ち至る瞬間を、鮮烈に

我々に示している。猛々しく荒れ狂う悪疫のあとにぽっかりと空いた静謐な平和と祈りの時間・・・ヨーロッパはその後もはやつつましく神の前に首を垂れる謙譲さを二度とその手に握ることはなかった・・・黒死病の後に訪れた沈黙の祈りこそ、「最後のヨーロッパ」のほんとうの光であったかもしれない」その時、村上氏はキリスト者ではないかと思つた。今回、再び氏の本を繰るに当たって、氏がカトリック信者であることを知った。日本ではクリスチャンは超マイノリティであるが、社会的にも大きな影響力を与え得る著名人にキリスト信者がおられるのは私には大きな喜びであり、頼もしく思つた。

ペストについて触れていく。

ペスト（黒死病）の流行では何といつても一四世紀の半ばから中世ヨーロッパを襲ったものがいちばん有名であろう。この時、人口の三分の一、あるいは四分の一が犠牲者となつた。この急激な人口減少が社会の体制を大きく変えたとは定説である。

しかしペストはいきなりこの地で発生したわけではない。ペストと正確に名付けられないまでも明らかにそれ以前から広範囲でパンデミックをくり返していたという。

ペストの今のところの最後のパンデミックは一九世紀末中国大陸に始まったもので、日本にも及んだ。私などは読んだことも聞いたこともなかった。

ちなみにペスト菌が明確に発見されたのは一八九四年のことである。日本の北里柴三郎も一役を買っている。それにしても、有史以来、災厄の元凶となった極小の細菌の正体が判明するまでに何という長い年月かかったことか。

今回のコロナウイルスによるパンデミックは、日本では二〇二〇年早々からであった。三年あまり前である。その時まもなく疫病(感染症)の正体は新型コロナウイルスによるものだと断定された。ペスト菌の発見までの歳月に比べるとなんとという速さであろう。

さらに、流行のさなかに、ワクチンが作られ、政府が率先して国民に無料で接種させた。また感染者には、特効薬ではないにしても症状を抑えるあらゆる薬や治療が施された。医療費は差別なくすべて無料、企業や商店は休業が補償された。国は莫大な財政を投入して国民を守った。

関係者が連日対策会議を開いて、一般の人

に感染対策の方法を示してくれた。その指示に従って私たちは外出を自粛し、消毒し、マスクで武装した。

WHOの最近の統計によるとこれまでの感染者数はおよそ七億六千万人、死者は六八八万人ほど。正確ではないだろうけど。ワクチン接種数は一三三億回に及ぶ。つまり、地域差はあっても世界中が一つになって戦ったのだ。さらに私たちは居ながらにして映像で感染状況を逐一知ることができた。ペスト禍時代とは天と地ほどの違いがある。科学や医学の進歩のおかげにまちがいない。私たちは幸いな時代に生きていると言える。

かつて、情報のほとんどない時代、人々は大きな天災や伝染病に襲われると決まって「神の怒り」や「神の裁き」だと信じて、まずは自らの生き方を反省した。ふだん疎遠だった教会に駆け込み、献金をし、熱心に祈り、善行に励んだという。反対に、自暴自棄になり、悪行に走った人もいたらしいが。災厄は人の心や魂に訴える力があつた。

さて、今はどうだろうか。このたびのコロナ騒動で、自分の心や魂、生き方にまで領域を広げ、考え、行動しただろうか。今ごろに

なつて考え直している。

あのころ何度か発令された「緊急事態宣言」と「アフターコロナ」を並べてみる。「激戦中」と「戦後」と置き換えてみると「アフターコロナ」が、何とも心地よく響いてくる。

ここで冒頭に戻るが、「アフターコロナ」とは何を意味するのだろうか。まさか、「コロナ以前」に戻ることではないだろう。そうだとしたら「前」と「後」の意味がない。コロナは確かに甚大な被害をもたらしたが、世界を変える何かをしたに違いない。善なるほうへ。

世界八十億人の、砂粒にも当たらない私人に限って言えば、以前の生活スタイルは革命の様に激変し、今は百点を付けたいほど満ちた日々を過ごしている。キリスト者として、ますます愛といのちに満ち満ちた神に接近し、信頼し、その庇護に感謝している。

ある説によればペスト菌は死なず、いつかまた襲来するという。コロナ菌はどうだろう。世に恒久平和や平安はない。次々に大禍がやってくる。人類は翻弄され続けるだろう。

私は見えない世界に目をそそぐ。真の平和と平安に満ちた不動の世界に。

アフターコロナに向かって

松下勝章

コロナが発生した時、世の声は、これは、中国の武漢の生物兵器による攻撃なのだと思われた。その事件の直前、アメリカのトランプ大統領の高圧的な外交があったのを覚えている。十数億人の国民を抱えた中国の為政者である周近平は、忸怩たる表情で、じつと耐えているかに見えた。(今に覚えているよ、このままではすまないから) そんな顔をしていたように思う。

そして、その想いが現れて出たのか、武漢からコロナが発生してきた。(負けない、負けない。やられたら、必ず、いつか、どんなに時間がかかってもやり返す)

弱者の執念。情念。

最近になって、とみに、台湾の近辺が騒がしくなってきたのも、そんな情念の表出かもしれない。一次攻撃、二次攻撃、三次攻撃・・・アメリカは、嫌な国を敵に回してしまったのかもしれない。

聖書の中に登場するサタンも、イエスの前に弱い。しかし、しつこいのだ。やられたら、やり返してくる。そうせざるを得ない。荒野

で試みを与え、人々に病を、飢えを、争いを、そして、裏切りを、十字架を、死を与えた。すべての事件の背後に、忌まわしい、霊の働きがある。

しかし、その度ごとに、神の栄光が示される。試みに勝ち、病を癒し、飢えた者を満たし、愛が語られ、許しが与えられ、復活が示された。そればかりか、神の全知によって、それら一切が見透かされていたことを、我々は、知らされている。なんとも、サタンは、やはり、神の栄光を表すための道具であったのだと感じさせられるのだ。

コロナ感染も然り。コロナのために我々は、オンラインで繋がるという生活様式を与えられた。以前よりも増して、説教が、ネットで配信されるようになり、人々は、在宅勤務を始め、都心から郊外への住居志向が増え、都市集中の問題が、皮肉にも、少し解消し始めている。

以前なら、繋がりが既に終わっていても不思議ではない友人や縁者との関係が、オンラインで継続され、否、より親密になった。こういう生活もあったのだ。こういう伝道もできたのだ、ということこそコロナは、凶らずも私たちに、教えてくれた。

神の恵み、コロナ禍にあり。サタンは、歯ざしりしているのかもしれない。しまったと焦っているのかもしれない。それでも、サタンは、しつこい。やつぱり、執拗に、あれこれと攻撃を考える。そして、その度ごとに、我々は、満たされる。

サタンを憐れみつつ、感謝しようではないか、そんなシニカルな想いにもさせられる今日この頃である。

もちろん、サタンの働きを使って、我々に恵みを与えてくださる神にこそ、栄光と誉れ、感謝と愛を捧げるべきではあるが・・・。

アフターコロナ、その後もやはり、何か忌まわしいことが来るのだろう。終末の後に至るまで。何よりも、『死』の力は、そして、その棘である『罪』の力は、目に見えないコロナウイルスのように世に満ちて、私たちにへばりついていく。バタバタと死者が現れているが、その数字は、コロナ患者の死者のように報告されていない。

コロナ禍を与えた『死』の力を持つへび、すなわちサタン、その力との戦いは、延々と続いている。

(延)

開け はばたけ

山角正子

パンデミックの歴史を知りながらも、そのような時代に自分が置かれるとは、想像したことはなかった。しかし、二〇二〇年から二〇二三年にかけて、全世界がコロナ感染症の危機にさらされ、膨大な尊い命の喪失、世界規模のロックダウン、入国制限、経済の危機等々、人類が過去に経験していない事態が起きてしまった。

日記をひも解くと、私が最初に「コロナ」について触れているのは、二〇二〇年一月二十八日で、二〇一九年十二月初旬に、武漢で一人のコロナウイルスの感染者が報告されてから、爆発的な勢いで感染が中国で広がっている」とある。

翌二九日には、大阪に住む次女から、マスクや除菌ジェルが店頭から消えているので、船橋で購入できるなら送ってほしいと要請あり」と記されている。その日、さっそくドラッグストアやコンビニを駆け回った。船橋でもほとんどの店で売り切れだったり、在庫数が極端に少ない状況だった。七店まわり、よ

うやく必要数をそろえることができた。日本中に、コロナウイルスが拡散してきていると実感した日だった。

連日報道はコロナ一色になっていった。毎日道府県別の感染者数と死者数が発表され、国民は振り回される日々を過ごし出す。

たびたび緊急事態宣言が出された。保育園・幼稚園、学校が休校となる時もあり、取りやめになったり縮小された行事も多かった。

今年小学三年生の孫は、入学式の時から今に至るまで、ずっとマスクを着けて学校生活を送っている。孫が一年生の頃お気に入りだったのは、緑と黒の格子模様の布マスクだった。『鬼滅の刃』の丹次郎の着物の柄のマスク。孫にねだられて、その柄の布を買い求めて、布マスクを作りまくった。いざ作ったものの、同じ緑と黒のマスクをつけた子供たちがあちらこちらにいて、自分の孫を見つけれないほど流行っていた。

二〇二三年三月に、政府は五月八日からコロナを感染法上の五類感染に位置付けると決定した。コロナが消滅したわけではない。「ウイズコロナ」「コロナと共存して生きる」という方向転換が世界的規模でなされたのである。

この発表に、ようやく英語学習を孫と始めるチャンスがめぐってきたと小躍りした。以前にも誘ったのだが、孫は乗り気でなかった。改めて、仲良しの友達と一緒だったらどうかと尋ねたところ、受け入れられた。(今までは家に友達を迎えて学習することははばかられたが、今後は可能と考えての提案である)

外国語を学ぶ効用の一つは、一瞬であっても人格を変えられることだと思う。昔、英語のゲーム・歌・会話・スキットの中では、積極的な、フランクな、フレンドリーな人間になっっている自身を発見したものだ。制限の多い生活をしてきた孫たちに、開放的・解放的になっっていく自身を感じてもらいたい。英語を通して視野を広げてもらいたい。世界の生活・文化などを知り、はばたいてもらいたい。

保管していた教材・教具の一部を整え、新たにテキストを揃え、教具を作り、スタンピングやシールを用意し、子供たちと学べる喜びに満たされている現在だ。

「過去の職業・体験を生かし、子供たちの心と世界を開きなさい」と神様が語りかけてくたださっている。

今までと同じでいいですか

榎尚子

あれから三年。

しきりに「元に戻った」という言葉が聞かれる。自由に旅行ができ外食ができる。人と会っておしゃべりするの当たり前。交わりこそが生きがいと言わんばかりの社会。

カレンダーを真っ黒にすることが生きがいだったような日々は突然終わりを告げた。それから三年間、籠る生活が続いた。外でのボランティアに忙しかった私は有り余る時間を家で過ごすようになった。その中で日曜日と木曜日は教会が開かれていたことを心から感謝したい。

そして今、マスクは自分の判断にゆだねられ、公の外出が可能になった。さあ外へ出ようではないか。また活動を再開しようではないか。

でも待って。この三年間の間に変わったものがある。それは年齢と体力と気力だ。どの年代の人もこの三年間は響いたに違いない。違う趣味に気づいたこともあった。再開したらこんな風に取り組みたいと思う活動もあった。ところがいざその時になると、前のよう

な気力がわいてこないのだ。これは明らかに老化であろう。

録音図書作りをするグループで選書係をしている。そのために本を読まねばならない。たまたま選んだ本の中に高齢化社会の現場で生きる方の本があった。牧師であり介護福祉士である著者の本は説得力があった。

若いうちは社会の中で多くのつながりを持つて生きているが、老いとともに一つずつ手放して最後は神様の所へ行く準備だけになる。それは認知症だったり病気だったりするが、老いや介護には宝物が秘められているという。そんなふう言われると何かを手放すことも大事な業なのかと思えてくる。

樋口恵子さんが高齢者に「微助っ人」(ピスケット)という言葉を広めている。わずかでもいい、助っ人になろうというのである。高齢者が助っ人になれる領域はごく僅かである。う。いたわられるばかりでなく何かをするところが世界を変える。迷惑をかけないようにと遠慮するばかりでは何とわびしいかと訴えている。

昔、ヘルマン・ホイベルスの『人生の秋に』最良の業は祈りだという詩を読んだ。老いの

喪失が押し寄せせる中で、祈りだけはその人から取ることはできないと。そして祈りこそが最良の業だと。若い時には気づかなかったあれこれを教えてくれる詩だ。

そんなことを考えていると、いくつかの変化が私の周りであった。長いこと続けてきた活動の中で仲間が事情により参加できなくなったり、通常のことができなくなったりということが身近に起こった。その分私が頑張ればと以前は考えてきただろう。しかしそれだけの力は今の私にはあるだろうか。

今までのことを変えることはできない。明日のことはわからない。だったら今日一日精いっぱい生きたい。そんな思いになってきた。

今、大切な人が重い病の中にいる。手の届かないところにいる。

直接お見舞いすることはできなくても、祈ることはできる。教会での礼拝後、みんなで祈った。病の中にある方に、心騒がせている私たちに、復活のイエス様が共にありますようにと。「イエス自ら近づきて共に行けり」は何度も私を励ましてくれるみ言葉だ。

祈りの後、何とも言えない落ち着きがみんなの中にあつた。

ペンを走らせる

長谷川和子

この三年間は世界中がコロナウイルスにおのき不安に駆られた日々であった。少し収まったようなニュースではあるが未だにコロナで苦しむ亡くなる人もいる。収束にはまだまだほど遠いのではと思わざるを得ない。インフルエンザ並にする方向にいきつつあるようだが果たしてどうなることだろうか。

この時期、様々な制約があったが、私たちキリスト者は日々の生活の中心は教会礼拝である。

リモートでの礼拝は今も来られない方のために行われているが、私も娘、孫等は教会で礼拝を守ることが出来た。会堂が広く、間隔をあけて坐ることが出来るからである。

午後の行事は昼食無しで一時間で済ませるようにしており、ランチサーブスや祈りの会は休み状態、夜の祈祷会と聖書の学びは続けられている。

兄弟姉妹でコロナにかかり、苦しんだ者もいる。元気になったとはいえ後遺症に苦しめられているようだ。コロナの正体がわからぬまま時が過ぎた。この間外出を控えた生活を

はあったが礼拝を守れたことは感謝なことである。

個人的行動としては、毎週水曜日に「一〇歳体操」をやっている。これは市の依頼を受けた民生委員が中心になって手足に重りを付けての体操が主で足腰を鍛える体操である。また、毎週火曜日の午後近くの体育館で卓球をやり、二時間体を動かし汗を流す。ここには多くの高齢者たちが体を動かしている。

昨年友人の誘いで、新潟県小千谷市に出かけて、中学生時代の女性六人と会うことが出来た。杖をついている者、耳が遠い者、体の不調を訴える者もいたが、よく喋りよく笑い、楽しい一時を過ごすことが出来た。

カウンセラー教室に通うようになって、一〇年になる。リモートの授業であったが今年になってから対面となった。

コロナ中でも、それなりに過ごしてきた。そんな中でも一番の収穫は『文は信なり』を発行できたことである。皆さんの書く力が結集され、あの困難な中であって、奇跡に近い発行ではなかったかと思うのである。

さてアフターコロナになった時、何を目標

すのかと問われれば、以前と変わらぬ生活だと思う。一番にやりたいことと言えば「旅行」である。既に多くの方が出かけている様子をテレビなどで視るが、完全に収束にならないければまだ出かけることに抵抗がある。

以前ストレスの多い職場であったが乗り越えることが出来たのは旅行があったからだ。湯につかり美味しいものを食し、新緑を眺めてゆったり過ごすのを楽しみにしている。

しかし、やはり生活の中心は教会で礼拝を守ること。そしてクリペンの一員として文書伝道に励む者でありたいと思っている。

ペンを走らせて文章を書き続けていくことである。証し文章を通してキリストを証しする使命が私たちにはあるのだから、色々な問題もあり、心折れるときもあるが、文を書くことに励みたいと思っている。

『あなたは主を避けどころとし、いと高き神を宿るところとした。あなたに災難もふりかかることがなく天幕に疫病も触れることがない』詩篇九一・九、一〇

コロナ禍の完全な収束を願って

本田真貴

新緑の美しい季節を迎えた。庭に植え替えたバラとシヤクヤクが根付いて、緑の葉が芽吹いている。

裏の林から、母がふきのとうとたらの芽を採り、山菜の天ぷらを作ってくれた。生命輝く春の到来は、三年間猛威を振るっていたコロナウイルスによる感染が収束しつつあることの吉兆のように思われる。

ふり返ると、この三年間は、テレビで毎日報じられる感染者数と死者数の多さに脅かされ、医療救急体制の逼迫に不安がつり、感染を避けるため、穴熊のように家に閉じこめる日々であった。マスクも当初は品切れ状態で、布マスクを手作りしたことを思い出す、有名人の感染によるあつけない死のニュースにショックを受けたこともあった。

教会の活動も大幅に制約を受け、一時期説教を録音した音声データを、メールに添付したものを聞いて、礼拝を守った。会堂に集まり、リアルに礼拝に参加できるようになって

も、讚美歌はあまり歌えず、交読文は削除され、信仰告白も使徒信条のみで短時間での礼拝が続いた。

J.パイパー氏によると、コロナウイルスを通して神は人々を悔い改めに導いておられ、また私たちクリスチャンを、キリストの再臨に備えさせておられると言う。

そうだとするなら、今、アフターコロナに向かい、私はどうすればよいのだろうか。

命の危機を脱して、人々の心も柔らかく耕されている。友人知人の救いを祈り、福音の種を蒔くことを続けていきたい。今までメールやLINEでしか話せなかった友人と、直接会ってたくさん話し、いっしょに食事をしたと思う。

イエス様の再臨の日を待ち望み、その日に備えることも大切である。戦争、地震、病の流行など、終わりの日が近く感じられる。主の前に静まって、主イエスよ来て下さいと訪れを待ち望み、教会のご奉仕に励み、その日を早めて下さいとお祈りできたなら大きな幸いである。

巣ごもりでたまった家の中の不用な物を整理して、身軽になり、いつでも主のみもとに行けるよう準備しよう。私は物の整理があまり上手でないので、このことが一番難しい。

コロナウイルスが完全に消滅するかどうかは私にはわからない。しかし、コロナ禍の完全な収束を願って、できるところからアフターコロナに向かって前進したい。

芽生えの道

安東奈穂美

三年前、コロナ禍となり、教会では礼拝以外のクラスや集会は休みとなった。オンライン礼拝も始まった。

日曜日の礼拝と水曜礼拝にはなるべく出かけたが、礼拝後は人と話さず速やかに教会から出る。日常生活でも人と接しないように心がけた。

毎日、聖書を読んで祈った。世の中がどのような状況になろうとも、聖書のことばは変わらない。神様は、私の小さな礼拝も喜んでくださるだろう。

コロナ禍となって二年が過ぎた初夏、娘から連絡があった。赤ちゃんを授かったので里帰り出産をしたいと言う。そろそろ秋、と言う頃に大きなお腹で帰ってきた。そして、アドベントに入る頃、男の子が生まれた。とても小さい体だが、抱くとずっしりと重みを感じる。イエス様も赤ちゃんとして生まれてくださったのだ、と馬小屋で飼う葉おけに眠るイエス様に思いを馳せた。

年が明けて、一月の中旬に娘親子は自分の住む所に帰っていった。ぽっかりと空いた部屋を見ると、涙が溢れてくる。しかし、泣い

てばかりではいられない。この世に生を受けた初孫は、前進、成長していく。私も遠くから孫を想って後ろを振り返らずに祈ることにした。

やがて年度末となった三月のある日曜日、久しぶりに婦人会で集まった。一人ひとりの近況や祈りの課題を聞き、こんなに心が踊るのか、と感慨深かった。集会が終わったとき、教会学校の教師をしている方が部屋に入ってきた。なぜか私の前に立ち、

「四月から月に一回でいいので低学年の礼拝で演奏してもらえませんか」と、全く予想だにしないことをおっしゃった。

私は聖歌隊の奉仕で精一杯で新たな奉仕は考えていなかったのだが、婦人会で気分が高揚していたためか、「月に一回なら」、そう答えていた。

とりあえず、次の日曜日に礼拝を見学した。アップテンポの曲が多く、礼拝の最後には教会のテーマソングも歌っている。これは大変なことになった、と思った。リズムカルな曲は、歌うのは楽しいが弾くのは難しい。年間主題聖句をもとにしたテーマソングにはとても優美な伴奏がついている。左手の部分は、和音を分散して弾くもので、さらに音の跳躍

がある。私はその奏法が大の苦手なのだ。

自分の担当する日まで練習、また練習。でも、どうしても弾けないところがある。ここは、メロディーを優先した妥協案でいくしかない、と考えた。必要な力を与えてください、と祈り、家族や友人にも祈ってもらった。子どもたちが心から賛美できるように。それだけをお願いした。礼拝の前日は弾くだけでなく、歌詞を味わいながら歌ってみた。

当日。やはり緊張する。早めに礼拝をする部屋に入り、浮足立った気持ちを落ち着かせるようにピアノに触れ、最後の練習。今、自分のもてるものを、そして私自身を神様にお捧げしよう。子どもたちと共に心から神様を礼拝しよう。

礼拝前には奉仕者が輪になって祈る。そして礼拝。一曲目、一年生の声がよく聞こえ、励まされる。他の曲も、最難関のテーマソングも神様に守られて奉仕を終える。皆の祈りと神様の働きを確かに感じた。

芽生えの道に、一歩、踏み出した春である。

見よ、わたしは新しいことを行う。
今、それが芽生えている。

イザヤ書四三章一八節

たどたどしい私の川柳

長谷川和子

この三年間で一番悲しかったのは弟を失な
ったことである。

私の下に妹と弟がそれぞれ二歳違っている。
順番から言えば私が先に逝くはずである。そ
れが四歳下の弟が先に逝ってしまったのだ。
台所の電球を取り替えようとして踏み台から
落下、意識を失い、数時間後に帰宅した姪が
発見、救急車で病院へ。それから一〇ヶ月間、
意識は戻ることとはなかったが、生きぬいてく
れたが帰らぬ人となってしまった。

コロナ渦だったので病院に駆けつけること
もできず、甥のみが面会を許され、私が対面
できたのは火葬場であった。苦労続きの弟だ
ったので「よく頑張ったね」という言葉しか
掛けることが出来なかった。

元気な姿を見たのは、五年前の夫の葬儀の
時、生前、もっと会って話しをしておけば良
かったと悔やまれてならない。気持ちに沈み
コロナ渦の中で一層家に閉じこもることが多
くなっていた。このままではいけない？と思
いながら。

ある時、市の広報で「川柳教室」を募集し
ているのが目に入った。とにかく外に出掛け
る機会を作らねばと何の知識もなかったが
入会したのであった。

桶川駅西口徒歩三分の所に「響の森桶川市
民ホール」がある。その中に埼玉県の文学館
があり、その「川柳教室」に月一回通うこ
とになった。

五、七、五、の文字をはめ込んで文章を完
成させるのだが、これがとても難しいことが
入会してすぐに理解できた。課題を与えられ
それによって表現することの難しさに頭を抱
えてしまうのである。

講師から「来月の課題は・・・」と言われ
ると「えっ難しいな」

「どう表現すれば・・・」と教室内はため息
交じりの言葉が飛び出す。

例えば

課題「映える」

桜咲く 日本のお春だ 出掛けよう

課題「熱中」

日暮れても 土を耕す 花畑

課題「肉」

温泉で 肉づき同じ 婦人たち

課題「多忙」

あれこれと やらねばならぬ こと多し

課題「それから」

それから 何をするのか なんだっけ

課題「器」

この花器に あう花々は どれだろう

一部を挙げてみたがたどたどしい文で恥ず
かしい！

雑詠では

寒い夜 お風呂に入り 癒やされる

すみきった 青空の向こうに 武甲山

長瀨の 桜街道 夢の道

五月の課題は「囲む」である。いまだに文章
が浮かばない！一週後の授業に間に合うか
四苦八苦している。



大江健三郎氏逝く

三浦喜代子

二〇二三年三月三日に八八歳で大江さんがこの世を旅立った。ついにあの巨匠も生を終えたのかと、しみじみと哀感を覚える。私の半世紀以上の歲月、なんとなく眼中にいた人であった。特別な愛読者でもなかったが、物書く上で教えられることが多かった。近年、大江氏の話題に接することがなかった。どうなさっているのかなと思うこともあった。

私が高校生の頃だったろうか、大学生の大江氏が「芥川賞」を受賞したことに大きな衝撃を受けた。そのころ私は書くことにほのかな憧れを抱いていた文学少女だった。「死者の驕り」という小説を読んだが、よくわからず、共感できなかった。その後しばらく作品に触れることはなかった。ただし、大江氏に大きな知的障害を持つ息子さんがおられ、氏がケアのために全力で取り組んでおられるのを知り、氏の人間性に深く感動した。偉大な作家である前に一人の「父親」として苦闘する大江氏に親しみを感じ、応援したいような気持ちになった。

大江氏が愛媛県の山深い地に生まれ育ったことにも興味を抱いた。ご両親やご家族のこと、村の様子がいくつもの作品に鮮やかに書き込まれていて、次第に氏への関心が深まっていた。ひとつひとつ覚えていないが、氏の視点や感じ方を追えるようになった。

大江氏が渡辺和夫という東大の先生を深く尊敬し、先生の下で学びたくて東大に入ったことに深く心打たれた。学ぶということはそういうことなのかと知ったのだ。渡辺先生は大江氏に、作家生活続ける上で三年毎に一つの主題を決めて書物を読み進めていくといふと助言を与えたという。大江氏はそれを実践し創作に取り入れていった。私は先生のアドバイスに深く感銘を受けた。なるほど、心の底にすんと落ちた。以後、曲がりなりにもまねをして、興味を感じた作家や歴史のある時代の書を出来る限り読んだ。ひとつのテーマに没頭することに喜びを覚え、一区切りとして私なりに小作品にまとめてみた。それは今も続けている。

大江氏の作品から遠ざかって久しい。今も創作活動が続いているのだろうか、それにし

ては情報がない。体調が悪いのだろうかなどと想像していた。突然のように三月三日に八八歳で他界した。「老衰」と報じていた。

「老衰」「老衰」……。ご自宅で静かに息を引き取られたということなのだろう。これは大江氏のはっきりした意志の表れであろう。すばらしい意志ではないか。大江氏ほどの方ならその気になれば現代医学の最高の終末ケアを受けられたらう。しかしおそらく大江氏は自然な死を選ばれたのだろう。ご家族も同意されたのだろう。「人は生きてきたように死ぬ」とよく言われるが、氏の生き方の根本が自然体だったのだろう。その延長に自然死があったのだろうか。

一時期はノーベル文学賞までいただき、世界的文学者として名声を馳せた大江氏だが、晩年は無理してお仕事はしなかったのだろう。体も心も自然に任せて、穏やかに暮らしたのではないだろうか。すべては私の勝手な想像であるが。そうした大江氏に限りない親しみを感ずる。大江氏の生き死を大いに参考にしたい。

HP ブログ「日々の泉」より

根開き 寄稿者 青梅

雪の降りつもった林に、木のまわりだけ雪が溶けていることがあります。これは、「雪根開き（ゆきねびらき）」や「根開き（ねあき）」と呼ばれ、春の訪れを知らせてくれる現象を指しています。

とくに、雪国地方のブナ林で見られる現象は、「ブナの根開き」と呼ばれ、写真の題材として多くの写真家に好まれています。

では、なぜ木の周辺だけ雪がなくなるのでしょうか。その理由の一つに、雪と木の（光の）反射率の違いがあげられます。雪は白いで、光をほとんど反射して温まりにくくあまり溶けません。しかし、木は黒にちかいか色をしているので、光を吸収して温まります。その熱が、木のまわりの雪を溶かします。もう一つの理由は、春が近づき、日差しが強くなってくると、光合成を行うため、木が水分を活発に吸い上げるようになります。すると、幹の中は雪の温度より高くなり、木のまわりの雪が溶けるからと言われています。

それも春の光が必要なのです。

その春が、わが家の裏山にも訪れました。

コロナ禍で外出がままならず、取り組んだ裏山の雑草駆除でした。

駆除した後に紫陽花、山吹などの草木を植えて、二年目の春を迎えようとしています。春、夏、秋には色とりどりの花を咲かせ、濃い緑の葉を茂らせていましたが、冬にはその面影など一切無く、ただの枯れ草のように萎れています。

そこに、先日の雪です。一面雪景色となり、はたして無事に春を迎えられるのかしらと心配していました。

今朝、裏山を見ると草木のまわりに土がありました。そうです。

「根開き（ねあき）」の現象がわが家の裏山に起きていたのです。

間違いなく草木は生きています。草木は春が必ず来ると信じて待っていたのでしよう。

忍耐の大切なことを彼らから教えられた今朝でした。

折り紙 寄稿者 スカイブルー

大学時代に合唱団で出会った夫は手先の器用な人でした。別に、そこに惹かれた訳ではありませんでしたが、振り返ってみると、それも導かれた出会いの一つに違いなとも思えます。特に飴やチョコレート、小さな包み紙が彼の指先によって蝶々や鳩や可愛いものになりました。

夫が天国に還ってから三年近くなりましたが、つい先日、娘が大きな菓子箱を見つけてきました。開けてみましたら、まあ！と思わず叫んでしまいました。

小さな小さな蝶々や鳩や鶴が、色彩豊かなキャンデーの包み紙の作品がビッシリ出てきました。学生の頃に彼が折ってくれたもので、私が、菓子箱に溜めておいたのだと気づきました。彼はあの時、どんな気持ちで、何を思い小さなキャンデーの包み紙に向かっていったのかしらと思います。

聖書や讃美歌の大切な頁にも挟まれていた小さな小さな折り紙の小鳥たち。ひっそりと何十年もお菓子箱の中で蓋を開けてもらうのを待っていたのでしょうか？

目次「文は信なりNo.46 初夏号」
アフターコロナに向かつて

- ★ アフターということ 三浦喜代子
- ★ アフターコロナに向かつて 松下勝章
- ★ 開け はばたけ 山角正子
- ★ 今までと同じでいいですか 榎尚子
- ★ ペンを走らせる 長谷川和子
- ★ コロナ禍の完全な収束を願って 本田真貴
- ★ 芽生えの道 安東奈穂美
- ★ たどたどしい私の川柳 長谷川和子
- ★ 大江健三郎氏逝く 三浦喜代子
- ★ ホームページ「日々の泉より」
「根開き」・「折り紙」
- ★ 編集後記 他

★編集後記★

四六号編集の最中、五月五日、WHOのテドロス氏は新型コロナウイルス感染症を巡る緊急事態宣言の終了を発表した。この宣言は感染症などに対する最高度の警告で、二〇二〇年一月三〇日に出されてから約三年三カ月続いたそうである。終了宣言は大きな節目を作ったと言えよう。日本も五月八日からは五類に移行、インフルエンザ並みの扱いになり、いよいよ「アフターコロナ」に向かうことになる。

コロナは確かに世界の隅々にまで多大な災禍をもたらした。その犠牲は計り知れない。一人一人が苦しむうめいた。かけがえのない者(物)を喪失奪われた。

一方で、置き土産もあった。その一つに、オンラインの活用がある。最初は苦肉の策であったが今や手放せない便利なツールである。教会では礼拝、祈祷会、学び会にも利用した。会えないと思っていた高齢の友にも会えた。遠隔地の講座を受講できる利便さは大きい。

コロナ禍の総括には長い月日がかかるだろう。一つの願いがある。以後、二度とコロナ禍をテーマにした特集はしないで済むように。 K.M

日本クリスチャン・ペンクラブ (JCP) 紹介

- ★起源は、1952年に発足した基督教文筆家協会にあり、村岡花子らプロの作家たちが立ち上げました。その後1963年に満江巖氏を中心に現在の名前に改名し、広く門を開いて、一般信徒が「あかし文章」を学び、書き、広める働きを進めて、現在に至っています。
- ★現在は2つのブロックで活動しています。★関東ブロック（関東以北の地域）★関西ブロック（大阪周辺と西の地域）です。活動内容は各ブロックが自主的に進めています。
- ★Web上にホームページを開いています。[\(http://jcp.daa.jp/\)](http://jcp.daa.jp/) ぜひご覧ください。
- ◎「あかし文章」に関心のある方は上記URLにご連絡ください。本誌代一部 200円